

図書案内

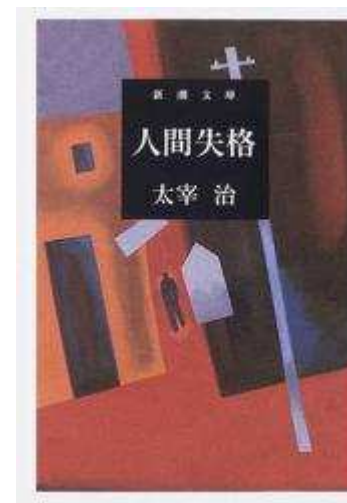
2018年 9月号

担当 3-1H 櫻田 3-6H 初鹿

一筋縄ではいかない小説特集

優れた文学作品は時代を超えて読み続けられます。しかし、すべての作品がハッピーエンドになるわけではなく、なかにはバッドエンドや考えさせられる結末のものもあります(現実ではハッピーエンドを迎えたいですが……)。そこで今回の特集は、一筋縄ではいかない小説を紹介します。

図書館にて貸出しています。



『人間失格』 太宰治／著

この作品が書かれたのが今から 70 年前の 1948 年。人という生きものは時代が変わってもあまり成長しないものなのかもしれない。子供の頃から他人はもちろん家族に対してさえ何を考えているのか見当がつかなかったため、一言も本当の事を言わず、おどけた変人として過ごした少年時代。青年期には女性と薬物におぼれ自殺未遂を繰り返す。作品中に登場する「人間、失格。」「まさに癡人」の言葉が、主人公である大庭葉蔵のすべてを物語っている。好き嫌いが分かれる話だと思うが、高校時代に読んでおいて損はない話である。

「恥の多い生涯を送ってきました」

『ストーリー・セラー』 有川浩／著

「図書館戦争」でおなじみの有川浩さんが送るこの本は、SideA、SideB の 2 編に分かれています。どちらも小説家の妻とその夫が主人公ですが結末が違います。本文のなかに「私はこの話を売って逆夢をおこしに行く」という言葉があるのですが、悪い夢を人に話すことで、夢とは逆さにしようとする強い思いが描かれたシーンが印象的でした。涙は流れますが、前を向くことができる作品です。

「人間は生きてたら絶対些細なことで喧嘩すんの。些細なことで喧嘩してるうちは、死がまだ現実的じゃないってことだよ」



『異邦人』 カミュ／著

母親の葬儀翌日、海水浴に行き元同僚のマリイと関係を持ち、友人のトラブルがもとで殺人を犯してしまう主人公・ムルソー。ママンを埋葬した日にもアラビア人を殺害した日にも、彼には頬が焼けるような太陽の光が差していた——。「親が死んだら悲しむ」「恋人に愛していると言う」「神を信じる」など、世間の「〇〇すべき」に心を動かされない彼は、我々の常識から外れた「異邦人」だとされ、死刑判決が下される。罪を犯した動機を「太陽のせい」と答えるその姿は、心のままに生きるのか善なのか悪なのか、幸福なのか不幸なのか、ということを考えさせられる。

「いつも、私は正しいのだ」



『四十九日のレシピ』 伊吹有喜／著

四十九日というのは人の死後その冥福を祈って 7 日目ごとに追善供養し、49 日目にその供養を終了することとされています。この期間に娘が実家に戻ってきて離婚騒ぎが起きたり、妻が生前希望していた「四十九日の大宴会」のために妻の教え子が続々と集まってきたり。休む間もない主人公の手元には妻が残した 49 枚のレシピカードがありました。人と人が一緒に暮らす楽しさや難しさ、いなくなっってはじめて分かる大切さなどがあたたかく描かれています。

「自分が消えたその先、娘はどんな事柄を書き付け、白紙を埋めていくのだろう。笑顔でいて欲しい。できることなら、幸せな事柄で埋め尽くされていって欲しい。」



一筋縄ではいかない？ 失恋と脳科学について

失恋すると、脳内快楽ホルモンであるドーパミンの供給が一気に下がり、心を落ちつかせる脳内ホルモンであるセロトニンの供給も下がります。失恋しても脳の状態はすぐに元に戻らないので「心の痛手」の回復が遅くなります。落ち込んでしまうのは相手を失ったことが引き金ですが、脳科学的に言えばドーパミンの供給が下がっただけ。半ば『脳の錯覚』なのです。この状態から回復するには美味しいものを食べる、好きな音楽を聴く、次の恋愛をするなどが効果的だとか。ドーパミンの切れ目が縁の切れ目、ともいえますし、人としての本当のお付き合いがはじまるともとれますね！

【出典】公益社団法人「小さな親切」運動本部 <http://www.kindness.jp/2016/05/19/>